

時制の区分は変化しうるか

山名 諒

1

現代の分析的時間論は、A理論とB理論の対立によって形成されている。A理論は、過去・現在・未来という時制の区分が客観的であると主張し、B理論はそれを否定する。この

論点は、空間や人称に関する他の指標詞と対比することでありやすくなる。誰もが自分のことを「私」と呼び、他の人を「あなた」や「彼」「彼女」と呼ぶ。そのなかで誰が本当に（客観的に）「私」なのかという問いに答えはありそうにない。空間的指標詞の場合でも同じだ。「ここ」はその発話がなされる場所を指示するにすぎず、どの場所が客観的に「ここ」であるのかという問いはナンセンスに聞こえるだろう。B理論は「過去」「現在」「未来」のような時制表現もそれらに類する指標詞と解釈する。「現在」は発話時点を、「過去」は発話時点よりも前の時点を、「未来」は発話時点よりも後

の時点をそれぞれ指す。それに対して、A理論によれば、どの時点が過去、現在または未来であるかは客観的な事実である。したがって、どの時点が客観的に現在なのかという問いには答えがあることになる。

時制区分の客観性をめぐるとの対立はしばしば時間経過の实在に関する対立に重ねられる。A理論によれば、どの時点が客観的に現在（過去または未来）であるかが変化していくことで時間が経過する。しかしB理論は一般に時制区分の客観性を否定するため、時制区分の変化、すなわち時間経過も認めない。

本稿では、客観的な時制区分が変化するという考えの整合性に疑問を投げかけることを目指す。その際、A理論に対する有名な反論の一つであるJ・E・マクタガートのパラドクスをとりあげる。マクタガートは古典的論文「時間の非実在性」[McTaggart, 1908]において、過去・現在・未来という区分

が実在するならば矛盾が生じるといふパラドクスを提起した。時制区分の客観性を唱えるA理論の支持者（A論者）はマクタガートに反論して、矛盾が生じないことを立証しようとしてきた。本稿の立場はマクタガートを擁護するものでもなければ、A論者側からの反論を支持するものでもない。パラドクスとその反論の検討を通して、客観的な時制区分の変化という考えには整合的に組み合わせられない諸原理が含まれていると示すことが本稿の目標である。

2

マクタガートのパラドクスの詳細に立ち入る前に、「時間の非実在性」の概略を紹介しておこう。マクタガートは出来事の時間的位置を指定する仕方に応じて二つの出来事の系列を区別する。その一つはA系列である。A系列において出来事は過去・現在または未来（これらを「A特性」とマクタガートは呼ぶ）であるかによってその系列内の位置が指定される。もう一つはB系列である。B系列内において出来事は「より前」「より後」という前後関係によって系列内の位置が指定される(1)。マクタガートは論文前半部において、時間にとつて基礎的なのはB系列ではなくA系列だという論証を行う。時間が存在するためには変化が可能でなければならぬが、変化はA系列によってのみ与えられる、というのがその主張の根拠だ。A系列において出来事はまず未来に位置している。それが一瞬一瞬より近い未来の出来事になり、現在になる。それから過去となり、一瞬一瞬より遠い過去となっていく。

このように出来事はそのA系列内の位置を——その出来事自身の内容とは独立に——変化させることができる。それに対してB系列における出来事の関係は不変である。ある出来事が別の出来事よりも前に位置するならば、その位置関係は変化することなく、永久的に成り立つ。それゆえB系列では時間にとつて本質的である変化を扱えない。しかしB系列を構成する前後関係は明らかに時間的な関係である。時間にとつて本質的な変化はA系列なしに得られないのだから、B系列が時間系列であるためにはA系列が不可欠である。そしてマクタガートは論文後半部において、時間にとつて不可欠であるとされたA系列には矛盾が含まれているという議論を展開し、最終的に、時間は実在しないと結論づける。以上が「時間の非実在性」全体の概略である。

論文後半部においてマクタガートが提起した矛盾は、A特性は両立不可能性であるが出来事はそれらすべてをもたねばならないという趣旨のものである。マクタガート自身の文章を引用しておく。

過去・現在・未来は両立不可能な特性である。どの出来事もそのどれか一つでなければならぬが、二つ以上であることはできない。「……」しかし、どの出来事もそれらすべてをもたなければならぬ。もし出来事Mが過去であるならば、それは現在および未来だった。もし未来であるならば、それは現在および過去となるだろう。もし現在ならば、それは未来だったし、過去となるだろう。

う。このようにして、それぞれの出来事に両立不可能な三つの項がすべて述語づけられることになる。このことは、明らかに、三つの項が両立不可能なことを矛盾する[……]。[McTaggart, 1908=2017, p. 408=41-2]。訳はおむね邦訳に従うが、文脈にあわせて変更した箇所がある。

この議論に対して次のような反論が予想される。たしかに出来事のもつA特性は変化するため出来事は三つのA特性をすべてもつとはいえ、それらを同時にもつのではない。たとえば現在の出来事Mはかつて未来だった、そしてこれから過去となるだろう。このように出来事は継起的にA特性をもつだから、矛盾は生じないはずだ。マクタガートはこの反論に對する再反論を二つ用意している。一つは、そのような答え方は悪循環に陥るといふものである。Mがかつて未来だったといふことは、Mが過去の時点において未来であるということに等しい。そして「過去において」という箇所からわかるように、ここでは高階のA系列が導入されている。そうだとすれば、A系列が矛盾しているにもかかわらず、その矛盾するA系列を使って矛盾を解消しようとする悪循環に陥る。もう一つの再反論は、無限後退を指摘するものである。高階のA系列に訴えることで一階のA系列の矛盾を解消できたとしても、そこで導入された高階のA系列にも再び矛盾が発生する。そしてその矛盾を取り除くには再び新たなA系列を導入しなければならぬ。同じプロセスは無限に続いていく。いずれにせよ、仮想反論は成功しない。

ここで論点となるのは、マクタガートの指摘するこの循環や後退が悪性のものかどうかである。ブロード [Broad, 1938, p. 313] やプライアー [Prior 1967, pp. 5-6] をはじめとするA論者が指摘してきた通り、A系列に矛盾がないことを示すために高階のA系列を持ち出すことが循環あるいは無限後退に陥ることを指摘したとしても、あらかじめ一階のA系列の矛盾が立証されなければ、そのことはA論者を責める根拠にはならない。矛盾の懐疑を払しょくしようとする度にA系列を導入することになるとはいえ、A論者は「はじめから回避すべき矛盾などない」と反論できるからだ。「出来事Mは過去であり、現在であり、未来である」という仕方でのA特性の述定が無限後退の発端(第一ステップ)となっているものの、その述定の仕方が誤っている。むしろ正しい述定の仕方の例は「Mはかつて未来だった、いま現在である、そしてこれから過去だろう」である。そして正しい述定からはじめれば矛盾がどの階層にも現れるという見かけは消え去る。このようにA論者は応答することができる。循環あるいは無限後退の指摘とは独立に、第一ステップの論拠となるものを提出できなければ、A論者の指摘の通り、パラドクスは見かけ上のものとなってしまうだろう。パラドクスの成否は第一ステップ(「Mは過去であり、現在であり、未来である」)をいかに正当化するにかかっている。

3

第一ステップを支持する論拠となるものがあるだろうか。

マクタガートは矛盾の導出について多くを語っていないため、彼のテキストからその論拠を読みとることは難しい。ダメツト [Dummett, 1960] は、マクタガートによる第一ステップの導出の背景には次のような考えがあると推測している。

ことの核心は、マクタガートが、実在とはそれについて完全な描写が原理上存在するところのものでなければならぬ、ということと当然のこととみなしている点にある、と私は思う。「……」ところで、もし時間が実在するならば、時間的なものは状況依存的な表現を使うことなしには完全に描写し得ないのだから、実在の完全な描写などというものは存在しないことになるだろう。存在するのは、「出来事Mが今起きている」という言明を含む一つの言わば最大限描写であったり、「出来事Mが起きた」を含むいま一つの最大限描写であったり、さらに、「出来事Mが起きようとしている」を含むまた別のそれであったり、ということになるだろう。(Dummett, 1960:86, p. 503-379) 訳はおおむね邦訳に従うが、文脈にあわせて変更した箇所がある)

ここで「状況依存的な表現」とは「私」や「ここ」のように発話文脈に応じて指示するものが異なる表現のことである。いま、実在はそれについて完全な描写が原理上存在しなければならぬという実在観を維持しつつ、時制を用いた記述が——「私」や「ここ」とは異なり——実在にあてはまると考

えるとすれば、「Mはかつて起きた」と「Mは今起きている」という二つの記述は、どちらも同じ一つの実在描写のなかに含まれなければならないことになる。たしかにその場合、出来事Mは現在であり、かつ過去であるという矛盾を回避することは困難だろう⁽³⁾。

このことが実際に第一ステップの論拠としてマクタガートがみなしていたものであるかについて私は判定することができない。しかしもし第一ステップが、実在についての描写は完全でなければならぬという考えに依拠するとすれば、次の二つの点においてパラドクスは幾分つまらないものになってしまう。第一に、時制区分の客観性が時間の実在にとつて不可欠であると考える者(A論者)はその論拠を単に拒否するだろう(これはダメツトの推奨する道でもあるが)。ある時点 t_1 でMが現在であり、より後の時点 t_2 でMが過去であるとする。そのとき、 t_1 において実在はMが現在であるという事実を含み、 t_2 において実在はMが過去であるという事実を含む。このように実在全体のあり方が時点によって異なることは可能だと反論することができる⁽⁴⁾。第二に、パラドクスは時間固有のものでなくなってしまう。同様の論拠から、様相に関する表現である「現実」を単なる指標詞として解することを拒否する立場⁽⁵⁾に対しても、類否的な形でパラドクスを作ることができてしまうだろう⁽⁶⁾。いずれにせよ、その論拠を採用した際に問題となるのは、実在の描写は完全なものでなければならぬかどうか、状況依存的表現を実在の描写のうちを含むことができるかどうかである。それは一

般的な論点になりはしても、時間固有の動性（変化）に直接関係するものではない。次節では、時間と直接関係しない前提を導入することなしに第一ステップを支持しようとする論拠を特定したうえで、マクタガートの論証の再構成を試みる。

4

「時間の非実在性」の発表という出来事、私がこの文章を執筆しているという出来事は、どの時点から見ることによって過去であったり、現在であったり、未来であったりするだろう。たしかにこの意味においては、出来事は三つのA特性を——異なる時点において——すべてもつことができる。どの出来事もそれが位置する時点においては現在という特性をもち、それが位置する時点よりも過去側の時点においては未来という特性をもち、それが位置する時点よりも未来側の時点においては過去という特性をもつ。しかしこのことは出来事と時点の間の時間的な位置関係から明らかであり、その関係自体はいつであろうと成り立つ不変のものである。そこに時間固有の動性を讀みとめることは難しい。また、もしこの水準のA特性しかなければ、ある出来事が過去、現在または未来であるかは観点依存的 (perspectival) なものとなってしまうだろう。A理論が主張するように時制区分が客観性をもつためには、どの出来事（時点）が端的に——時点へのいかなる参照もなしに——過去、現在または未来であるのかについての事実が存在しなければならぬ(7)。たとえば「時間の非実在性」の発表という出来事はそれが位置する時点(一九〇八

年)においては現在であるが、端的に過去である。時点への参照を伴わないこの事実が、出来事と時点との間に成り立つ不変的な位置関係からは導かれないことに注意してほしい。マクタガートがA系列に見出した時間固有の変化とは、出来事がどのA特性を端的にもつかが移り変わっていくことだと解釈できる。

「時間の非実在性」の発表という出来事は端的に過去であり、私がこの原稿を書いているという出来事は端的に現在である。時点への相対化なしに出来事に帰属されるこうしたA特性を「端的なA特性」と呼ぶことにしよう。ここで問題となっているA特性が端的なA特性であるとするならば、マクタガートのパラドクスは以下のような形で再定式化できる。

マクタガートのパラドクス

1. 出来事Mの端的なA特性が変化する。
2. (1)より、出来事Mは三つの端的なA特性をすべてもつ。
3. 端的なA特性は時点への相対化なしに出来事に帰属される特性である。
4. (3)より、出来事Mは未来であり、現在であり、過去である。
5. A特性は両立不可能である。
6. (4)と(5)は矛盾する。

これに対してA論者は、出来事は三つのA特性をすべてもつ

とはいえ、継起的にもつのだと反論できるだろうか。すなわち「出来事Mは過去でも現在でも未来でもある」と記述するのは誤りであり、「出来事Mは過去において未来であり、現在において現在であり、未来において過去である」と記述しなすべきだ、と。A論者によるこの応答に対してマクタガートは次のように再反論できる。ここで問題となっているA特性は、出来事が端的にもつA特性のことである。しかしA論者が提案する記述は、出来事にA特性を端的に帰属していない。いいかえれば、出来事Mが端的に過去、現在または未来であるのかが示されていない点で、この記述は端的なA特性についての記述として不適切である。それゆえ上の応答によってA論者は、いかにして出来事が矛盾に陥ることなく端的なA特性を変化させられるかを説明することに成功していない（このことが説明できなければ、客観的な時制区分が変化するというA理論の主張の整合性も危ぶまれる）。さらに言えば、「Mは未来において過去である」という記述内の「未来において」という箇所にも端的なA特性が登場しているが、その高階のA系列にも同じ論拠から矛盾が指摘できる⁵⁾。どの階層においても矛盾を指摘できるために、高階のA系列を持ち出すことで矛盾の解決を図ることはできない。

前節で見たように、A論者はパラドクスの第一ステップ（Mは過去であり、現在であり、かつ未来である）における述定の仕方は誤りであると批判していた。それゆえ、避けられるべき矛盾などはじめから存在せず、循環も後退も悪性ではない、と。だが、パラドクスを上のように再構成すれば、

誤っているのはA論者の側であるとマクタガートは再反論できることになる。マクタガートに言わせれば、A論者の提案する記述は端的なA特性についての記述とはなっておらず、そして高階のA系列に訴えることは矛盾の解消どころか再生産である。

5

前節のようにパラドクスを再構成することで、第一ステップの論拠を与えることができた。では、これによってA系列の矛盾が証明されたことになるだろうか。

一方で、出来事はA特性を継起的にもつとA論者が主張するのは正しいように思われる。時間のなかで生じる性質変化は時点間で状態を比較することによって見出される。たとえば、リングが昨日緑であり、今日は赤であるとき、その二時点間で色の状態を比較することで赤から緑へという色の変化が起きたことを確認する。変化は時点をまたいで成り立つ事象であるから、このことは当然である。そして変化する性質が複数の時点参照して帰属される限り、一つの出来事が過去でも現在でも未来でもあるということは導かれない。出来事は異なる時点において異なるA特性をもつだけである。それゆえ矛盾は生じない。

しかし他方で、ここで問題となっている端的なA特性が、時点への参照なしに、つまり端的に帰属されるA特性であることを考慮すると、A論者の提案する記述は出来事の端的なA特性についての記述として不適切である。その記述におい

て出来事のA特性は端的に帰属されていないからだ。そしてもし端的なA特性が出来事に帰属されるならば、矛盾が生じるように思われる。あるものの色が変化するとき、それは緑と赤のような複数の色の性質をもつように、端的なA特性が変化するためには、一つの出来事が複数の端的なA特性をもつ必要がある。「Mは過去において未来であり、かつMは現在であり、かつMは未来において過去である」と記述すればたしかに矛盾は導かれないが、そこで端的に帰属されているA特性は一つ（現在）だけであるから、それによってMの端的なA特性における変化が記述されていることにはならない。もし一つの記述のなかで複数のA特性が端的に帰属されるならば、それは矛盾を表現することになるだろう。

以上のことから、マクタガートとA論者はそれぞれ端的なA特性の変化という考えに含まれるいくつかの異なる側面を切り取ること、異なる主張を導いていると解釈することができる。マクタガートは、端的なA特性が時点への参照なしに帰属されるという事実を適切にとらえているものの、変化が複数時点を参照して記述されるという事実を無視している。逆に矛盾の成立を否定するA論者は、後者の事実を正当に扱っているものの、その代償として端的なA特性を不当に無視せざるをえない。

変化の側面を十分に扱えていないため、出来事が三つのA特性をもつという矛盾を導く論証は失敗している。しかしA論者の方も、時間経過の实在にコミットし、それを客観的な時制区分の変化として定式化する限り、無傷で済むわけでは

ないだろう。一つの出来事が両立不可能なA特性をすべてもつかどうかはもはや問題ではない。真の問題は、端的なA特性の変化という考えを整合的な仕方では理解することができないということにある。

6

端的なA特性の変化という考えに含まれている四つの原理を整理することで、本稿の主張をより明確にすることができ。端的なA特性は絶対性と唯一性という二つの原理を要請し、変化は相対性と共通性という二つの原理を要請する。

端的なA特性

絶対性…出来事がある端的なA特性をもつとき、そのA特性は時点への相対化なしに帰属される。

唯一性…ある出来事が端的にもつA特性はただ一つであり、二つ以上の異なるA特性を端的にもつことはない。

変化

相対性…ある対象の性質が変化するとき、それは異なる時点において異なる性質をもつ。

共通性…一般に、二つの性質XとYがZにおける変化を構成するのは、その二つの性質が共通のカテゴリ

Zのもとに属するときに限る。たとえば、あるものの色がXからYに変化するとき、性質X、Yはどちらも色のカテゴリーに属している。

「Mは過去において未来であり、現在において現在であり、未来において過去である」というA論者の記述は、変化の原理の一つである相対性を優先するものである。変化が複数時点を参照して記述されるものであることをふまえている点で、A論者の応答は正しい。しかし当の記述においてA特性は端的に帰属されていないため、それは端的なA特性が要請する相対性を反映していない。仮に「Mは過去において未来であり、かつMは現在であり、かつMは未来において過去である」と記述することで相対性を反映させたとしても、そこでMに帰属されている端的なA特性が一つ（現在）だけであるならば、これは共通性を満たさないことになる。

逆にマクタガートは相対性を無視し、残りの原理（共通性・絶対性・唯一性）を採用することで矛盾を導こうとしたと解釈できる。まず共通性により、出来事Mが端的なA特性を変化させるとき、Mは複数の端的なA特性、たとえば過去と現在をもつ。そして絶対性により、Mには過去と現在が端的に帰属される。すなわち、Mは過去であり、かつ現在である。だが、唯一性より、Mが過去であり、かつ現在であることはない。こうしてマクタガートは矛盾を導く。しかし相対性を無視している限り、その結論は成立しない。

両立可能性と両立不可能性の間の矛盾も、それに対する反

論も、四つの原理の一部を恣意的に切り取っている。問題は、これら四つの原理すべてを整合的に組み合わせることができないということにある。本稿の議論が正しければ、客観的な時制区分の変化という考えはこれら四つの原理を含むため、それを整合的に理解することは不可能である。

そもそも変化は時点間の比較を通して記述されるのに対して、端的なA特性は時点への参照なしに（端的に）帰属されるものである。出来事がどのA特性を端的にもつかいついて時点間で比較することが意味をなさない以上、端的なA特性の変化を語ろうとすることは無理な試みだと言えるだろう。私は、本稿によって再構成された形でマクタガートが自らのパラドクスを考えていたのかについて確信をもてない。しかしこのような仕方でも再構成するときにそのパラドクスは時間固有の問題、すなわち時間経過（時間の動性）をいかに理解すべきかという問題を浮き彫りにするという点については確信している。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP2212611の助成を受けたものである。

参考文献

- Adams, R. M. (1974). "Theories of Actuality". *Noûs* 8 (3): 211-31.
 Bourne, C. (2006). "A Theory of Presentism". *Canadian Journal of Philosophy* 36 (1): 1-23.

- Broad, C. D. (1938). *Examination of McTaggart's Philosophy*, Vol. 2. Cambridge University Press.
- Cresswell, M. J. (1990). "Modality and Mellor's McTaggart". *Studia Logica* 49 (2): 163-70.
- Dummett, M. (1960). "A Defense of McTaggart's Proof of the Unreality of Time". *Philosophical Review* 69 (4): 497-504. (「マクタガートの時間の非実在性証明を擁護して」『真理と偽り謎』収録、M・タメット、藤田晋吾訳、勁草書房、一九八六年、三七〇―八一頁)
- Horwich, P. (1987). *The Asymmetries in Time: Problems in the Philosophy of Science*. MIT Press. (A・ホーウィッチ『時間に向きはあるか』、丹治信春訳、丸善、一九九二年)
- McTaggart, J. E. (1908). "The Unreality of Time". *Mind* 17: 457-74. (J・E・マクタガート『時間の非実在性』、永井均訳、講談社、二〇一七年)
- Mellor, D. H. (1981). *Real Time*, Cambridge University Press.
- Price, H. (2009). "The Flow of Time". in Calender, C. (ed.), *The Oxford Handbook of Philosophy of Time*. Oxford University Press.
- Prior, A. (1967). *Past, Present and Future*, Oxford University Press.
- Sakon, T. (2015). "Presentism and Triviality Objection". *Philosophia* 43 (4): 1089-109.
- Zimmerman, D. (2005). "The A-theory of Time, the B-Theory of Time, and "Taking Tense Seriously"". *Dialectica* 59 (4): 401-57.
- 入不二基義 (2007) 『時間と絶対と相対』、勁草書房。

【註】

(一) 言うまじむなへ、「A理論」「B理論」という名称はそれぞれ

の理論が時間にとって本質的であるとみなす系列に由来している。

(2) マクタガートは矛盾の導出の箇所は明快ではなく、これらでパラドクスの再構成が多く提出されてきた。本稿は、パラドクスの解釈に際して端的なA特性と変化の整合性に注目する点で、特に「入不二」(2007, ch. 4) および [Price, 2009] と重なるところがある。これまでなされてきた解釈との異同を逐一明らかにすることは避けるが、本稿で提示する四つの原理を用いた解釈はオリジナルのものである。

(3) ダメットによる解釈と類似するパラドクス解釈は他にも見られる。たとえばホーウィッチ [Horwich, 1987, ch. 2] によれば、通常の実在観は、実在に含まれる事実が観点相対的ではなく絶対的であることを要請するため、出来事は継起的な仕方ではA特性をもつというA論者の反論は成功しない。彼はそうではない実在観を排除しないが、そのためには独立の議論が必要になると考えている。それに対して、本稿によって再構成されるパラドクスは観点相対的な事実を認めるかどうかには依存していない。

(4) この考えは命題の真理性が時点によって異なるというtemporalismと呼ばれる立場としてしばしば表現される。そしてtemporalismは命題の真理性は不変であるとするeternalismと対比される。一般的にA理論は前者を採用し、B理論は後者を採用する。

(5) 通常の現実主義ではなく、「現実」の指標詞的解釈を拒否しつつ他の可能世界および単に可能的な存在者の実在を認めるような立場を挙げることが類否はより正確になるだろう。様相の形而上学におけるこうした立場はアダムス [Adams,

[1974]において「現実性についての単純性質説 (simple property theory of actuality)」という名のもとに検討されている。この立場に対してアダムスが挙げた諸問題は時間においても類否的に成立する点で興味深い。

(6) クレスウエル [Cresswell, 1990] は、ダメットによる解釈の多くを受け継いでいるメラー [Mellor, 1981] 流のパラドクスと同じ形式のものが様相の領域にも成立してしまうことの論証を行っている。クレスウエルの結論は、様相にも同型のパラドクスが成立してしまうがゆえにメラーの論証は妥当ではないというものである。

(7) A理論は、命題の時点と相対的な真理値と端的な真理値を区別し、現在時点における真理値が端的な真理値と一致すると考えることで、現在の特権性を特徴づけることができる ([Zimmerman, 2005] [Bourne, 2006] [Sakon, 2015])。出来事のもつ端的なA特性を端的な真理値のような、時間の存在論からある程度ニュートラルな概念に適宜置き換えても、後に提示する四つの原理が当てはまる限り、同様のパラドクスを指摘することができる。

(8) 現在が過去と未来に対して特権的な身分をもつならば、出来事は現在においてもつA特性(だけ)を端的にもつ。その場合、先の記述は「過去において未来であり、端的に現在であり、未来において過去である」へと書き直すことができるが、後の議論を先取りすれば、この記述は共通性を満たしていないため、端的なA特性の変化についての記述として適格ではない。問題の核心は、変化は複数の時点をまたいで成立する事象であるのに対して、端的に現在である時点は唯一であることにある。